

知ってる？

硝子の街 小樽



がらす まち おたる
知ってる？ 硝子の街 小樽
発行：卒業記念硝子製作体験実行委員会
(小樽市産業港湾部産業振興課内)
〒047-8660 小樽市花園2丁目12番1号
電話 0134-32-4111 (内線) 263



平成25年7月発行

～ 卒業記念硝子製作体験 参考資料 ～

～ガラスの歴史～

人類は、文字を発明して歴史に記録を残す以前の先史時代より、黒曜石と呼ばれるガラス質の天然石を割り、その鋭い破片をナイフや 鍬・槍の穂先として使っていました。

人類初めてのガラスは、今から4000年以上も昔、世界最古の文明発祥地メソポタミアで作られたといわれています。

それからとても長い年月が経過し、約3000年以上前に、金属で作った芯（コア）にガラスを被せて器を作るコアガラス技法が誕生し、ガラスの普及は進んだといわれています。

そして、約2000年前のローマ帝国で吹きガラス技法が生まれました。これによって、それまでは一部の貴族にしか使われていなかったガラス器を、広く使われる日用品として大量生産する事となりました。当時は、無色透明の物が最高級品とされていました。

その後、約700年前のイタリアで、吹きガラス技法の礎が作られ、当時は国家の秘技法とされたヴェネツィアンテクニクを国内に閉じ込める為、ムラーノ島にガラス職人が集められました。小樽でも北一ヴェネツィア美術館でムラノガラスの様々な作品を見ることが出来ます。

日本では元々、器としてガラスを日用品に使う文化がなく、約1400年前の飛鳥時代から奈良時代にかけては、主に装飾品として、仏像の目玉や仏具として使われていました。

器として本格的に作られ始めたのは、わずか300年前。特に薩摩切子は海外の製品と比べても素晴らしい出来栄でした。

また、その頃、北海道ではアイヌ玉と呼ばれるガラス玉が、アイヌ民族によって用いられていました。これは、アイヌ民族によって作られた物ではなく、日本、ロシア、中国との交易の時、物々交換によってもたらされたものが多いとされています。

～小樽のガラス～

小樽では、明治24年（1891年）、井上寅蔵さんによって稲穂町に新築された工場です。最初にガラスの製造が開始されたといわれています。

明治30年代になると、市内にもいくつかのガラス工場が生まれましたが、その1つとして明治33年（1900年）、浅原硝子製造所が創業し、ガラス製の生活雑器の製造を始めました。



（薩摩切子）

浅原硝子製造所は、明治43年（1910年）に漁業用の浮き玉の製造を始めました。

浮き玉は、漁で使う網に付けるもので、元々は木材が使われていましたが、ガラス製の浮き玉

は、浮力が大きく水圧に強いので、木材のものよりも優れていました。

大正期になり、北洋漁業が盛んになるにつれ、浮き玉は大量に作ら

れましたが、その後の北洋漁業の衰退と、プラスチック製の浮き玉の登場によって次第に作られなくなっていきました。

浅原硝子製造所は、100年以上前から浮き玉を作っている日本で唯一の工房です。

その後、浅原硝子製造所の浅原久吉さんのご子息、久重さんは独立して販売店を出しました。

浅原健蔵さんがその販売店を受け継ぎ、昭和46年（1971年）に、北一硝子と名前を変えました。そして、北一硝子は、小樽の歴史を感じる石造りの倉庫を改築して使用するなど、「小樽といえばガラス」というイメージを作り上げ、小樽観光の拠点となる礎を築きました。

一方、アメリカでは1962年、ハーヴィ・K・リトルトンさんが小型の溶解炉を提案し、ジョエル・フィリップマイヤーさん、マーヴィン・リボフスキーさんたちが中心となり、それまで大きな工場ではしか作られなかったガラスを個人単位で作ろう！という動き（スタジオグラスムーブメント）が生まれました。

この動きを意識し、昭和54年（1979年）、ガラス工芸家浅原千代治さんと7人のスタッフにより、ザ・グラススタジオ イン オタルが開設されました。

ガラス工芸をより多くの人に知ってもらい、手造りガラスの味わいを感じてもらうため、一般に公開されることのなかった宙吹きガラス創作、技法を公開し、製作体験も出来る工房を小樽で初めてオープンさせました。

現在小樽には、吹きガラス工房と工場が、合わせて14ヶ所あります。この他にも切子、バーナーワーク、サンドブラスト、スタンドグラスなどの作家が集まる日本で有数のガラス工芸品の生産地となっています。



（浮き玉）